

# おとさだ 乙貞

第265号 通巻46第2号  
令和8（2026）年6月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター  
〒524-0212 守山市服部町2250番地

TEL&Fax 077（585）4397  
Mail [maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp](mailto:maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp)

本日6月1日は衣替えの日です。その歴史をひも解いてみると、この慣習は平安時代に遡り、冬服と夏服とを更衣（衣替え）する中国の風習に倣った宮中の儀式が大衆化したものです。

有職故実に基づく「装束更衣之事」には、旧暦4月1日に夏物へ、10月1日に冬物への更衣が儀礼化していたことや、衣替えに伴って、例えば、宮中の女房が顔を髻す際のマストアイテムであった扇も檜扇から蝙蝠に持ち替えることも記されていて、衣替えがトータルコーディネート服飾文化に昇華していったことがわかります。

さて、平安時代は、現在ほどの高温期であったとされています。男性の官吏はともかく、重ね着文化の象徴のような十二単をまとった女房たちの夏は如何ばかりだったのかと慮ってしましますが、十二単は儀礼の際の装束で、日常的には肌着である小袖のうえに単衣や袷を羽織っていたようです。

夏場は通気性のある紗の単衣で過ごしていて、暑い最中の儀礼が終わるやいなや、身にまとった十二単を一枚一枚ではなく、裳の紐一本を解くことでまとめて脱げるようになっていました。十二単の正式名称は五衣唐衣裳といい、「裳抜けの殻」はまとめて脱いだ後の十二単（裳）が人の形をしていたことが由来譚になったとする説もあります。

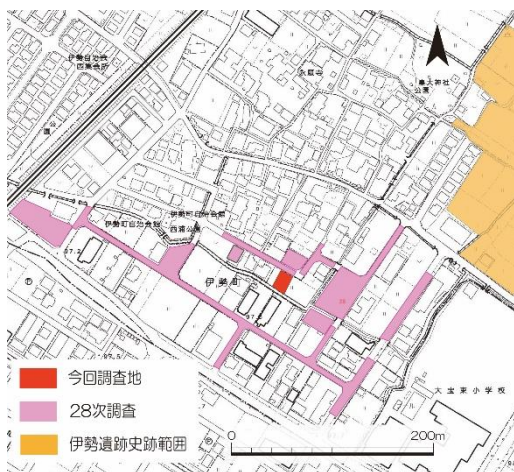
それでは、夏本番を思わせる炎天下、汗を流しながらの発掘作業で上がった調査成果やセンターの開催事業についてお伝えします。

## 発掘調査だより

### 伊勢遺跡第150次調査

伊勢遺跡の広がりのある伊勢町字伊勢里における集合住宅建築工事に先立って、伊勢遺跡第150次調査を令和8年5月11日～20日までの期間で実施しました。

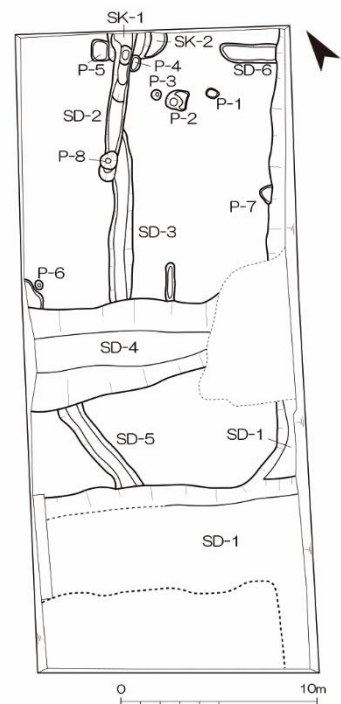
調査の結果、右図のとおり土壌（SK-1，2）や溝（SD-1～6）、多数のピットを検出しました。それぞれの遺構からは、土師器や黒色



調査位置図

土器埴などが出土していて、おおよそ鎌倉時代前期の単一時期の集落遺構と考えられます。

左図には、今回の調査位置と既往調査地を明示しています。今回調査地は隣接する区画整理事業に伴う第28次調査地で検出した平安時代後期～室町時代の集落遺構の広がりといえます。（沖田）



遺構検出平面図

## 整理調査だより 阿比留遺跡第8～15次調査

現在、前号でもお伝えしました阿比留遺跡第8～15次調査成果の整理作業を行っています。

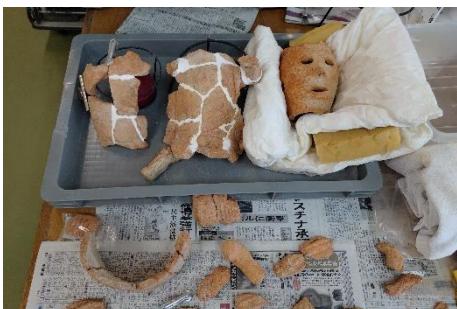
【木製樹物】今回の調査は、埋没古墳の周濠から石見型木製品をはじめとする木製樹物が出土し、一躍注目を集めた第6次調査（以下前調査）地内8地点で実施しました。

前調査同様に古墳の周濠から石見型木製品と笠形木製品が出土したため、5月25日（月）には、鈴木裕明さん（奈良県立橿原考古学研究所調査部長）に出土品を実見していただきました。鈴木さんは、木製樹物や古墳時代の木製威儀具研究の第一人者で、第6次調査や、過去には下長遺跡の威儀具についても指導していただいています。

今回も出土品を具に観察された後、「前調査で、2基検出したうちの別古墳出土の石見型木製品と今回の出土品との形状やサイズの差異は時期差を反映している。2基の古墳は、それぞれ、年代決定資料として扱える土器や埴輪も出土しているが、石見型木製品だけにフォーカスすれば、今回出土した方が古相を呈している。2基の古墳は1



木製樹物の観察風景  
（上写真左から3人目、下写真左側が鈴木裕明さん）



第9次調査出土形象埴輪の接合作業風景  
中：動物形埴輪 下：人物埴輪

世代程度の時間差を想定できるのではないか。」など、数々の教示をいただきました。

【形象埴輪】第9次調査では、前回調査で検出した古墳SX-2の周濠の続きを検出し、ここからは形象埴輪が出土しました。人物埴輪の頭部や動物形埴輪の脚部を除くと、埴輪のほとんどは破片の状態で出土していることや胎土で個体を峻別することが難しいため、接合作業に時間を要しています。現段階では、人物埴輪と動物形埴輪を特定していて、人物埴輪は頭部と体部、動物形埴輪は胴～脚部と頭部を接合作業で特定することができました。

今後、人物埴輪はまず、頭部と体部が同一個体であるのかどうかと、そして巫女形埴輪の島田髻とは異なる何かを載せた痕跡があり、その人物像を明らかにすることを課題にしています。動物形埴輪については、当初馬形埴輪を想定していましたが、接合が進んだことによりイヌかイノシシ、馬以外のモチーフが考えられるようになりました。

【木製品】第14次調査地からは、前調査で検出した埋没古墳の周濠より、やや時期の遡る旧河道も見つかっていて、そこからは次頁に写真掲載する木製品が出土しました。長さ約138cm、幅35.5cm、厚さ2cmを測る板材で、一面には底面約30×42cm、上面約20×33cm、高さ5cmの方錘台状を削り出し、約5.5×4.5cmの方孔を斜め方向に貫通させています。

このような立体的に割り出した板材に方孔を斜めに穿孔する例として、掲載する下長遺跡出土の棟押しと呼ばれる建築部材を上げることができます。

棟押しは当初、建物の棟に取り付ける部材と考えられ、こう名付けられましたが、現在では建物の戸口装置の部材の可能性も示唆されるなど、必ずしも性格は明確ではありません。

下長遺跡出土2例(下写真)のうちの1例や奈良県平城宮下層出土品は、形状は異なりますが、割り出し3か所の中央に方孔を斜めに貫通させています。割り出した厚みのある個所に斜めに方孔を穿つような板材が棟押ししか見当たらないことから、その系譜上にあるもの、あるいは棟押しとともに建築物の一部を構成する部材の可能性も念頭に置いて精査していきたいと考えています。

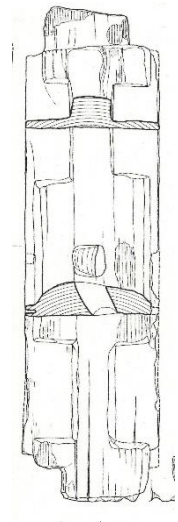
また、今回出土品は、方孔に別材が挿入された状態(下右写真)



下長遺跡出土棟押し2点



阿比留遺跡出土木製品  
別材が挿入された方孔



阿比留遺跡出土品

右：奈良県平城宮下層出土棟押し

で見つっていますが、挿入されている別材が当初からの部材であれば、斜め穿孔の方孔がどのように機能していたのか、このような板材や棟押しの用途解明に大きな手掛かりになるものと考えています。

木製樹物や埴輪、木製品の復元作業やその精査にはまだまだ時間が必要になりますが、詳細がわかりましたら、その都度報告いたします。

## 春季講演会を開催しました！

令和8年度春季講演会「野洲川流域の弥生時代～服部遺跡の形成から伊勢遺跡の成立まで」を5月16日(土)に開催しました。

今回の講師は、元名古屋女子大学教授の丸山竜平さんです。丸山さんは滋賀県教育委員会の文化財技師として、昭和～平成の行政発掘調査を牽引され、その後、名古屋女子大学で後学の育成に当たられていました。滋賀県と東海地方という2つの視座をお持ちの丸山さんが概観した弥生時代の野洲川流域について講演していただきました。

ご講演では、「野洲川流域での稲作文化は服部遺跡で開始し、そして伊勢遺跡で到達点を迎える。その過程で、滋賀県に特徴的な木偶は男



講演風景



約60名の受講者は熱心に耳を傾けていました。

女セットで用いられた生殖祭祀具、農耕儀礼では穀霊祭祀に用いられ、子孫繁栄や豊穡を願う滋賀県、野洲川流域の精神文化をうかがうことができる。

伊勢遺跡の独立棟持柱建物の心柱は服部遺跡で検出した屹立した石棒の系譜を引くものではないか、そして大型建物は心柱の覆い屋と考えてみるのはどうだろ。」など、約60名の受講者にとって、目からうろこが落ちるような講演内容で、瞬く間に時間が過ぎました。

丸山さん、ご講演ありがとうございました。

## トピックスtopics トピックスtopics トピックスtopics トピックスtopics

### 埋蔵文化財センター友の会

### 令和8年度総会と第1回見学会が開催されました。!

5月28日（木）、友の会総会と本年度1回目の見学会が開催されました。今年の開催場所は東近江市、まず、総会は豊郷小学校旧校舎の元教室で開催、その後、アニメ‘けいおん’に登場する高校のモデルとなった同校舎を見学しました。

午後は、同市五個荘の教林坊別院マーチャントミュージアムと江戸時代以降、数多くの近江商人を輩出した五個荘金堂地区の近江商人の屋敷や社寺が立ち並び町並みを散策しました。五個荘金堂地区は平成10年（1998）には、景観が重



豊郷小学校旧校舎前での記念撮影



上左：総会開催風景 右：屋食風景 下左：豊郷小学校旧校舎見学風景  
下右：教林坊別院マーチャントミュージアムのシンボル・猪目書院窓

要伝統的建造物群保存地区に選定され、平成27年（2015）には、文化遺産にも認定された古い町並みは多くの人々を魅了しています。

参加された会員のおひとりは、「近くにこのような文化遺産があることを初めて知った。友の会活動を通じて、滋賀県の歴史を学んでいきたい」との思いを語られていました。

今回の総会・見学会の開催にあたっては、ボランティアガイドの小松さん、馬場さんに豊郷小学校旧校舎を案内していただきました。感謝申し上げます。

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』や Facebook からご覧いただけます！



◀ 歴史のまち守山はコチラから

<http://moriyama-bunkazai.org>

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶

<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



【後記】冒頭に取り上げました衣替えの現在に至るまでの経緯をもう少し詳らかにします。鎌倉時代には、宮中はもとより武家社会にも浸透し、調度品や建具などの設えにまで及ぶようになります。江戸時代になると、旧暦の5月5日から8月末は裏地のない帷子、9月9日から翌年3月末までを綿入れという従来の衣替えの合間の4月1日から5月4日と9月1日～8日は中綿を抜いた裏地のつく袴という年4回の武家社会の公式となり、そのいでたちは一般庶民にまでも広がりました。珍らしい苗字で見聞きすることのある四月一日は、前年九月九日から更衣していた綿入れを合いものの袴にするため綿をぬいた四月一日がその所以です。

明治維新によって服飾は洋服化が進み、明治6年（1873）の新暦の採用によって、衣替えは4月1日が現在の6月1日に変わります。この日を前後して、時の官吏や軍人、学校などの制服が夏服に様変わりし、現在の衣替えに近い様相を見せます。宮中儀式に端を発する衣替えは長い歴史の中で、単に日本独特の蒸し暑い夏場を快適に過ごすための手立てだけではなく、季節の移ろいを重んじる日本人の感性、四季の節目を重んじる日本の文化へと昇華させていったと考えることができます。（馬耳東風）

